第２章
啓蒙のための講演が喫煙・禁煙の意識に及ぼす影響

～講演前後のアンケートから～

はじめに

禁煙への啓蒙は大変重要である。喫煙問題に対する講演会を行うことも啓蒙の一つの方法であるが、実際禁煙を決意する上で、講演はどのくらい効果があるのだろうか。アメリカで医師の生涯教育（CME: Continuing Medical Education）の成果をまとめたところによると、講演のように、教育を受ける側が一方的に受け身になる講義形式の教育では、行動変容にまで結びつけるようなインパクトを与えるのが困難であったが、相互作用を与え合うような対話形式で行った場合は効果があることが指摘されている（55）。

一方でタバコに対するセミナーが医学生のタバコや禁煙指導への態度の変容に有効であったという研究もある（56）。

日本において、禁煙への啓蒙を目的とした講演が青少年に禁煙や喫煙防止に結びつく効果を与え得るのかを検討するため、保健所から依頼のあった講演会において、アンケート調査を行い、講演前後の知識、態度の変化について解析した。

対象と方法

対象：

次の５校の学生、生徒、児童を対象とした。

(1)青森市内のＡ専門学校（保育福祉関係）：学生 241 名、男女別不明

(2)浪岡町内のＢ高校（普通科）：全校生徒 499 名のうち、当日出席していた生徒 376 名、男性 233 名、女性 143 名

(3) 藤崎町内のＣ高校園芸科：当日出席していた生徒 143 名、男性 106 名、女性 37 名

(4) 田舎館村内のＤ中学校：当日参加していた生徒 295 名、男性 139 名、女性 156 名

(5) 浪岡町内のＥ小学校：5､6 年生の児童 77 名、男性 41 名、女性 36 名

方法：

講演の目的と内容

講演は、「喫煙が喫煙者自身やまわりの他者、社会全体に与える悪影響」を知識として知ってもらい、学生や生徒自身が「タバコを吸わない生活」を自分の意志で選んでもらう目的で行った。どの学校でも児童、生徒、学生は全員参加を前提とし、アンケートは全員提出を原則とした。

A専門学校では、1998年7月16日の午後に、青森市の県民福祉プラザの大ホールにて約1時間の講演を行った。主に喫煙の危険性をグラフや表をスライドで示し、ビデオも活用した。

B高等学校では、1999年7月13日午後に同校の体育館にて約1時間の講演を行った。主に喫煙の危険性を肺や血管の標本写真やポスターのスライドで示し、ビデオも活用した。

C園芸高校では、1999年9月6日午後に同校の体育館で、内容はB高校とほぼ同様の講演を行った。

D中学校では、1999年11月7日の午後に同校の体育館で、授業参観日の保護者とともに、内容はB高校とほぼ同様の講演を行った。

C小学校では1999年11月6日の午前に同校の図書室で、5年生50分、6年生50分と2クラスに分けて、内容はB高校とほぼ同様の講演を行った。

テーマは「喫煙と健康」、内容はともに、「喫煙の社会的問題」、「喫煙に対する日本と外国の事情の相違」、「喫煙者自身の健康への悪影響」、「他人の健康への悪影響」、「喫煙が次の世代に与える悪影響」、「喫煙と未成年」、「喫煙と女性」、「喫煙は依存症」、「禁煙の方法と効果」などについてであった。

質問紙の回収方法

添付資料の質問紙を配布し、回答してもらった。(資料参照)

A専門学校については、アンケートは、筆者が講演前に参加者全員に講演前のアンケートを配布し、その場で全員から回収した。また、講演後にも筆者が同様のアンケートを配布し、その場で回収した。無記名で行った。

その他の学校については、担任の先生に、事前に講演前のアンケートを配布し、無記名で、教室で生徒(児童)の答えが見えないよう裏返しにして回収してもらった。講演後も、教室に戻ってから、担任の先生が講演後のアンケートを配布し、無記名で、生徒(児童)の回答が見えないように裏返しにして回収し、筆者に送付してもらった。

どの学校でも、講演への欠席者、中途退出者などについての回収はしなかった。

未成年の喫煙状況を問う項目もあり、無記名なので、同一人物の回答であっても、講演前後の回答は対応させなかった。

分析の方法

ひとつでも解答欄に空欄のある回答用紙は、回答不備として、除外した。

回答のうち、各設問について、講演した喫煙の問題をより正確に認識した答えに高得点がつくように5段階に点数化し、前後の得点の平均点を算出した。たとえば、「喫煙は本人に害がある」という意見では、「すごくあてはまる」を5点、「あてはまる」4点、「どちらでもない」

3 点「あてはまらない」2 点「まったくあてはまらない」1 点とした。逆に「タバコは嗜好品である」という意見では、「すごくあてはまる」を 1 点、「あてはまる」を 2 点、「どちらでもない」を 3 点、「あてはまらない」を 4 点、「まったくあてはまらない」を 5 点とした。あてはまる方の点数が高くなるように点数化にした設問は(1)、(3)、(4)、(5)、(6)、(7)であり、あてはまらない方の点数が高くなるように点数化した設問は(2)である。点数の平均点は高い方が、「筆者が講演で伝えたい内容を理解している」と判断できるように配点した。設問(2)の「たばこは嗜好品である。」に関しては、嗜好品という言葉が小学生には難しいと判断し,「たばこはかっこいいと思う。」に変更した。また各設問への回答が講演前後で意見の平均点に差が出たかどうかについての比較は t 検定にて行った。

結果

A 専門学校

学生 241 名の平均年齢は 19.2±1.8 歳、(男性 56 名、平均年齢 19.3±2.0 歳、女性 185 名、平均年齢 19.2±1.7 歳)(年齢は講演のあった平成 10 年 7 月 16 日現在)

分析件数・・講演前 227 件 (回収件数 237 件、うち回答不備 10 件)、　講演後 221 件 (回収件数 235 件、うち回答不十分１４件)。

B 高等学校

男性 225 名、女性 148 名、性別不明 1 名。平均年齢 16.2±1.0 歳 (男性 16.2±1.0 歳、女性 16.2±1.0 歳)

分析件数・・講演前 376 件 (回収件数 402 件、うち、26 件は回答不備)、講演後 374 件 (回収件数 408 件、うち、34 件は回答不備)。

C 園芸高校

男性 104 名、女性 36 名、平均年齢 16.5±0.8 歳、男性 16.5±0.8 歳、女性 16.3±0.9 歳

分析件数・・講演前 143 件、講演後 142 件。

D 中学校

男性 139 名、女性 145 名、平均年齢 13.7±1.6 歳、男性 13.8±2.1 歳、女性 13.6±1.0 歳

分析件数・・講演前 295 件男性 139 名、女性 156 名、講演後 284 件。

E 小学校

生徒の平均年齢 11.0±0.7 歳、男性 11.1±0.6 歳、女性 10.9±0.7 歳

分析件数・・講演前 77 件　男性 41 名、女性 36 名、講演後男性 76 名、女性３６名、

どの学校も、講演への参加者全員の質問紙を回収したが、講演の当日に欠席者がいたため、全校生徒数と講演前の回収件数が一致しておらず、また、中途退出者がいたため、講演前後で回収件数が異なった。

（1）喫煙率

A 専門学校では喫煙者は講演前 227 名中 73 名（32.3%）、講演後 221 名中 70 名（31.7%）。

B 高校では喫煙者は講演前 376 名中 110 名（29.3%）、講演後 374 名中 111 名（29.7%）。

C 園芸高校では、講演前 143 名中 47 名（32.9%）、講演後 142 名中 41 名（28.9%）。

D 中学校では、講演前 295 名中 6 名（2.0%）、講演後 284 名中 2 名（0.7%）

E 小学校では、講演前 77 名中 4 名（5.2%）、講演後 76 名中 3 名（3.9%）

（2）知識の変化

表 1 -(1)に示すように、「大人の喫煙は個人の自由である」という意見については、講演の前後で点数が有意に増加したのは、A 専門学校（$p<0.01$）、C 園芸高校（$p<0.01$）、D 中学校（$p<0.01$）E 小学校（$p<0.01$）だった。B 高校では講演前後の変化は有意ではなかった。

表 1 -(2)に示すように、「たばこは嗜好品である」（小学生では「喫煙はかっこいいと思う」）という意見については、A 専門学校、B 高校、C 園芸高校、D 中学校では、いずれも有意な変化はなかった（NS）。E 小学校では、喫煙をかっこいいと思わないと答えた生徒が有意に増加（$p<0.01$）した。

表 1 -(3)に示すように、「喫煙は本人に害である」という意見については、講演の前後で点数が有意に増加したのは、A 専門学校（$p<0.01$）、B 高校（$p<0.01$）、C 園芸高校（$p<0.05$）、D 中学校（$p<0.05$）、E 小学校（$p<0.05$）で、すべての学校で有意に増加した。

表 1 -(4)に示すように、「喫煙は他人に害である」という意見については、講演の前後で点数が有意に増加したのは、A 専門学校（$p<0.05$）、B 高校（$p<0.05$）、D 中学校（$p<0.01$）、E 小学校（$p<0.01$）だった。C 園芸高校では講演前後の変化は有意ではなかった。

表 1 -(5)に示すように、「禁煙は体によい」という意見については、講演の前後で点数が有意に増加したのは、A 専門学校（$p<0.01$）のみで、B 高校、C 園芸高校、D 中学校、E 小学校では講演前後の変化は有意ではなかった。

（3）自己の喫煙に対する態度の変化

表 1 (続)-(6)に示すように、非喫煙者に尋ねた「私はこれからもタバコを吸わない」という意見については、講演の前後で点数が有意に増加したのは、C 園芸高校（$p<0.05$）、D 中学（$p<0.01$）、E 小学校（$p<0.01$）だった。A 専門学校と B 高校では講演前後で有意な変化はなかった。

表１(続)-(7)に示すように、喫煙者に尋ねた「私は近いうちにタバコをやめたい」という意見については、A 専門学校、B 高校、C 園芸高校、D 中学校、E 小学校でいずれも、有意な変化ではなかった。

自分自身の喫煙に対する態度を尋ねた設問（６）、（７）では、非喫煙者の「私はこれからもタバコを吸わないようにしよう」という意見は、講演前後で小学生、中学生では顕著に、園芸高校生では有意に、増加しているが、高校生ではほとんど変化がなく、専門学校生は増加したが有意ではなかった。喫煙者の「私は近いうちにタバコをやめたい」という意見はいずれの学校でも講演前後で有意差はみられなかった。

（４）喫煙者と非喫煙者との比較

表２（①～④）の（１）に示すように「大人の喫煙は個人の自由である」という意見については、非喫煙者では B 高校を除く、すべての学校で講演の前後で有意に点数が上がったが、喫煙者では、D 中学校（$p<0.01$）、A 専門学校で($p<0.05$)講演の前後で有意に点数が増加したほかは、各学校とも変化がなかった。また講演の前後どちらも、非喫煙者の方が喫煙者よりも点数が高かった。

表２（①～④）の（2）に示すように「タバコは嗜好品である」（小学生では喫煙はかっこいいと思う））という意見については、講演の前後で、小学校の非喫煙者で有意($p<0.01$)に増加した以外は、すべての学校で喫煙者、非喫煙者の点数に有意な変化はなかった。そして、すべての学校で、非喫煙者の方が講演前後とも喫煙者よりも点数が高かった。

表２（①～④）の（3）に示すように「喫煙は本人に害がある」という意見については、講演の前後で、非喫煙者では C 園芸高校を除くすべての学校で、有意に点数が上がったが、喫煙者では、C 小学校（$p<0.05$）、A 専門学校で($p<0.05$)有意に点数が増加した他は、各学校とも変化がなかった。また講演の前後どちらも、非喫煙者の方が喫煙者よりも点数が高かった。D 中学生の喫煙者では、講演の後点数が減っていたが、講演後、喫煙者の回答数も減っていた。

表２（①～④）の（4）に示すように「喫煙は他人に害がある」という意見については、講演の前後で、非喫煙者では E 小学校（$p<0.01$）と D 中学校($p<0.01$)で、有意に点数が上がったが、他の学校では有意な差ではなかった。喫煙者では、D 中学校（$p<0.01$）と、B 高校($p<0.05$)点数が上がったが、他は、各学校とも有意な変化がなかった。また講演の後に C 園芸高校、E 小学校で喫煙者の点数が非喫煙者より高かった他は、非喫煙者の方が喫煙者よりも点数が高かった。

表２（①～④）の（5）に示すように「禁煙は体によい」という意見については、講演の前後で有意に点数が上がったのは、A 専門学校の非喫煙者だけで($p<0.01$)、他の学校ではすべて喫

煙者、非喫煙者とも有意な変化はなかった。また、どの学校でも非喫煙者のほうが喫煙者より点数が高かった。

喫煙者の少ないD中学生、E小学校を除き、全体を通して、非喫煙者は、講演前後とも喫煙者より点数が高く、講演前後の比較でも、各設問において、知識や意見に有意差が出やすい傾向が見られた。

考察

すでに喫煙者になってしまった未成年が、高校生以上ではどの学校にも3割程度いた。1996年の簑輪らの調査からも、高校生男子の中で毎日喫煙者の割合は既に、25.4%に達していたが、特に筆者の住む東北北海道地区での喫煙率が高かった（57）。本研究でも中学生と高校生の間に喫煙率が急速に変化していたことが示された。喫煙を防止する意味では、高校生より低学年への喫煙予防教育の必要性が示唆された。

小学生でもすでに喫煙者になっている生徒が5,6年生合わせて4名いた。教師からの情報では過去に喫煙が発覚したのは家庭的に問題があるケースとのことだが、喫煙の害は認識していながら、やめようという動機付けにはつながっておらず、タバコ以外の問題を含めた個別指導の必要性が示唆された。

講演によって、喫煙者自身に対して、および、他人に対する喫煙の害について、より重大に捉える人が有意に増えた。禁煙の効果をより肯定的に捉える人が増える傾向にあったが、専門学校以外は有意ではなかった。アンケート用紙の裏に質問や意見を書いた生徒の中に、「タバコの害を受けた人はもう元には戻れないのか」という心配を書いていた生徒がいたが、喫煙の害のインパクトが強すぎて、禁煙の効果を過小評価してしまった可能性が示唆された。

非喫煙者の「これからは吸わない」という意見は、小学校・中学校など年齢の低い子供で顕著であった。すでに3割程度が常習喫煙者になってしまう前に、小学校、中学校からの喫煙予防教育の重要性が示唆された。一方、喫煙開始年齢について考慮すると、喫煙予防教育を受けた小学生が、喫煙の誘惑にもっともさらされる高校生になった時まで、講演で得た知識が持続し、本当に喫煙しない人生を選ぶかどうかについては、不明である。今後は、小学校で喫煙予防教育を受け、講演直後に、「これからも喫煙はしない」という意見をもった子供たちが将来喫煙しないかどうかという前向き追跡調査も必要であろう。

A専門学校とB高等学校について比較してみると、A専門学校の方が、講演者の目的とした変化がより顕著に現れた。A専門学校で講演を行ったのはB高等学校で講演を行った時よりも1年も前であり、この1年の間に筆者の講演の技術は向上し、講演のためのスライドやビデオ

などのツールはより豊富になったと考えられる。それにも関わらず、A専門学校の方が筆者の期待する変化が顕著に現れたのは、講演を聴く対象の年齢的、社会的な要素が絡んでいると思われた。

A専門学校の3年生には既に就職活動を始めている学生もいたが、「就職先で喫煙者は雇わない所があるので禁煙したい」と、講演の後で、相談に来た学生もおり、社会への入り口に立ち、否応なく、分別を持たなくてはならない状況になっている年頃であることが関わっていることは否定しがたい。一方、高校生はまだ未熟で、しかも、社会や既成のルールに反発を感じやすい年頃である。喫煙はそんな自己主張の道具になっている側面があり、なかなかタバコをやめようという意見に持ってゆくのは難しいことが示唆された。

発達心理学ではKohlbergらが、他律から、自律へ、結果論的判断から動機論的判断へという方向性により包括的で論理的な人間の道徳観についての6つの発達段階を体系づけた(58)。その中では社会秩序を受け入れる既製の慣習的道徳観を無批判に受け入れ、学んでゆく段階が小学生の時期である。さらに、道徳的価値は慣習を超えた自己自身の原則にあると考え始め、人は法を変える権利があることを、理解し始める時期が中学、高校の時期である。Kohlbergは親やまわりの大人のいうことを、無批判に受け入れて模倣する段階から、それらをいったん否定し、既成のルールに反発する段階を経て、最終的には私たち自身がより、幸福になるために、より統合された、より普遍的な原理にのっとってルールを構築する段階へと変化して行くということを指摘している（59)。

小学生は既成の道徳的価値をありのままに受け入れてゆく発達段階にいるため、講演で聞いたことが意見に反映されやすいのではないか。一方、高校生はまさに、その道徳的価値を考え直し、既成の価値に反発するステージにおり、中学生はその中間に位置する。さらに専門学校生は、より普遍的な価値観を構築し始める高次の発達段階へと、成長しつつあるため、高校生への講演よりも、専門学校生への講演の方が、期待した効果が上がりやすかったのかもしれない。その意味で言えば、全く無批判に大人の話を受け入れる発達段階にある小学生のうちにしっかり、タバコの怖さをたたき込んでおくことが重要であろう。また、一方で、より包括的で普遍的な倫理観やルールを構築し始める発達段階にあると思われる就職前の新社会人への啓蒙も有意義なのではないだろうか。

本研究により、1回きりの講演や喫煙予防教室でも啓蒙の効果が期待できることが明らかとなった。しかし、高校生では意見がかわりにくく、また既に喫煙者になってからでは、意見が変わりにくいことから、より下の学年からの継続的なアプローチの必要性が示唆された。相互に影響し合えるようなワークショップやクイズ、喫煙を回避する対人的技術の練習をするため

のロールプレイなどを取り入れた実習形式の喫煙予防教室の開催など、他の形式を試みる必要がある(60)とともに、日常的に生徒や学生と接する教師からの継続的な働きかけが重要でもある。その意味で、この調査でわかったことを、現場の先生に十分フィードバックして、これからの指導に役立ててもらえるよう努力すると同時に、現場の先生にこの問題について自らの言葉で語ってもらえるように、交流を深めながら、情報交換して行く必要がある。

学校にとどまらず、社会全体が変わって行く必要もある。自動販売機や、たばこの広告の氾濫などが未成年の喫煙率を増加させる重大な要因となっているが、未成年を取り巻く環境そのものへのタバコ規制が重要なのはいうまでもない。茨城県の八千代村のように青少年無煙の町を宣言し、町ぐるみで未成年を守って行く運動を積極的に展開して行くこともたいへん重要であろう。

結論

小学生から専門学校生までに対して行われた講義形式の喫煙問題への啓蒙のための講演会は、知識を与えると言う意味で、有意な変化をあたえることができ、啓蒙の意味があることが示唆された。講演前後で喫煙の害をより重大に捉えるようになり、たばこは嗜好品の範疇を越えたものであるという認識をもつ者が多少増えた。その変化は小学生、中学生と専門学校生では顕著であったが、高校生では変化が明らかではなかった。しかし、非喫煙者の喫煙防止では小学校、中学校で「これからもタバコを吸わないつもりである」という意見が顕著に増加したが、各学年を通して、喫煙者の禁煙への態度を有意な差をもって変化させることはできなかった。

。